

問題であると述べる。さらに、フランスにおいては排除された他者は「フランスの市民権を獲得した北アフリカ出身のムスリム移民とフランス生まれのその子孫」(p. 220)であるのに対し、ウズベキスタンでは「排除する側も排除される側も基本的には同じウズベク人であり、信仰実践の有無や程度に違いはあってもムスリムというアイデンティティを共有する人々」(pp. 220–221)であるとされる。

ここでは、ジョン・W・スコットによる『ヴェールの政治学』において研究対象とされているフランスのヴェール問題と、ウズベキスタンにおけるヴェール問題が比較される形で描かれている。確かに、政治的な言説分析を行ううえでは、ヴェールを問題化することによって排除される「他者」を明らかにする視点は非常に意味のあるものである。しかし、フランスの文脈において構築されてきた議論のなかに本書を位置づけることは、ウズベキスタンの状況の理解を助けるというよりもむしろ、本書の主題として存在しているモダニティの議論から読者の目を逸らすことになりかねない。よって、ここでは敢えて全く文脈の異なるフランスやトルコの文脈と比較するのではなく、ウズベキスタンや中央アジアという地域を議論の出発点とすることもあり得たのではないだろうか。こうすることによって、評者は、中央アジアという地域や、旧ソ連圏の他の地域という、地域性に根付いたイスラーム・ヴェール研究の可能性が開けるのではないかと考える。

本書は、パキスタンにおいてヴェールを纏う女性たちへのインタビュー調査を行ってきた評者にとっても大変多くの示唆を得られる一書であった。特に、ヴェールの取り扱いに関する公的な言説の分析は、評者自らの研究の課題でもあったため、本書からは学ぶところがとても多かった。メディアやジャーナリズムによって、ムスリム女性のヴェール着用をめぐる問題が非常に単純化された図式のもと伝えられる傾向にある現在の日本において、ヴェールをめぐる実践の複雑性を明らかにした本書は、ムスリム女性たちが生きる現実に対する日本の人々の理解を深化させるインパクトを有している。

〈参考文献〉

- アハメド, ライラ 2000『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史的根源』(林正雄・岡真理・本合陽・熊谷滋子・森野和弥訳) 法政大学出版局。
- アブー＝ルゴド, ライラ 2009「はじめに——フェミニストの望みとポストコロニアル的状况」ライラ・アブー＝ルゴド(編)『女性をつくりかえる』という思想——中東におけるフェミニズムと近代性』(後藤絵美・竹村和朗・千代崎未央・鳥山純子・宮原麻子訳) 明石書店, pp. 14–70。
- スコット, ジョン・W. 2012『ヴェールの政治学』(李孝徳訳) みすず書房。

(賀川 恵理香 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Andreas Johansson. 2019. *Pragmatic Muslim Politics: The Case of Sri Lanka Muslim Congress*. Cham: Springer, vii+153pp.

本書で描かれるのは、ムスリムがマイノリティである国家におけるムスリム政党による実践である。本書では、政党の出版物や政治家の演説において用いられてきたイスラームの宗教的用語や象徴の分析を通して、その目指すところはイデオロギーにもとづく政治ではなく、むしろ統一されたマイノリティの代表として、国内政治でのリスク低減を図るプラグマティックな政治実践であることを論じている。

多民族国家スリランカでは、「ムスリム」というカテゴリーは民族への言及の際に用いられることが多い。全人口の約75%を多くが仏教徒でシンハラ語を話す「シンハラ」が占めるスリランカにおいて、タミル語を話しヒンドゥー教徒が多数を占める「タミル」に次ぐ第2の民族マイノリティが、人口の約9%を占め一般的に「ムスリム」と呼ばれ、タミル語を母語とする「スリランカ・ムーア」である [Department of Census & Statistics, Ministry of Policy Planning and Economic Affairs 2015]。ここでは、シンハラ・タミルの民族区分が言語にもとづいているのに対して、「スリランカ・ムーア」は信教にもとづく民族区分となっている。他方、信教という側面に焦点を当てると、イスラームを信仰する人々は「スリランカ・ムーア」以外にも存在する。例えば、「マレー」と呼ばれるマレー起源の少数民族などである。近年ではサラフィー主義者対スー

フィー主義者といった対立図式も存在し、イスラームを信仰する人々といっても一枚岩ではない。このように、スリランカにおける「ムスリム」というカテゴリーは曖昧さをはらむものであり、文脈により「ムスリムとは誰か」が異なってくる。

本書が焦点を当てるスリランカ・ムスリム会議 (Sri Lanka Muslim Congress: SLMC) は、スリランカ初のムスリム政党である。SLMC の設立には、イギリス植民地期以降の国内における民族ナショナリズムと、その延長にあるシンハラ・タミルの民族紛争が深く関わっている。1947年の独立以降シンハラ中心的政策を進める政府に対し、タミルの民衆・政治家は反発してきた。しかし、政治による状況改善はなされず、70年代にはタミル多数派地域である東部・北部州の分離独立を求める反政府タミル武装勢力が組織され、1983年に政府軍との間での内戦が始まった。そうした過程でシンハラ・タミル両者のナショナリズムから排除されたムスリムが、政治の場で自分たちの意見を代弁するために設立されたのが SLMC であったといえる。民族を代表する政党を持つタミルと異なり、ムスリムはそれまで独自の政党を持つことはなく、主にシンハラ多数派地域である南西部出身のムスリム政治家はシンハラ多数派政府との協調路線を取ることで利益を確保する戦略を取ってきた。しかし、彼らの利害はしばしばタミル多数派地域のムスリムとは一致しなかった。SLMC は 80年代初頭、特にムスリム人口の多い東部州で、地元の名家出身の弁護士であり初代党首となる M・H・M・アシュラフを中心として東部州のムスリムの声を代弁するために設立された。その後は 1989年総選挙で 4 議席を獲得して以降国会議員が選出されており、スリランカの「全ムスリムの代表」としての立場をとっている。

本書は全 6 章から構成されている。以下、本書の内容を概観する。

第 1 章では、上述したスリランカの民族問題や SLMC に関する歴史的背景を概観したのち、本書の問題意識が述べられる。本書では SLMC の実践を「ムスリム政治 (Muslim politics)」という概念を用いて分析する。著者は、ムスリム政治の実践においては、ムスリムに共有されているイスラームの宗教的伝統に関する様々な要素が用いられていると述べる。一方で、そうした宗教的伝統に関する要素は一般的には固定的・普遍的な意味を持つものとして捉えられるが、ムスリム政治においてはそうした意味を持つものとしてではなく、政治的な動員を行うために感情に訴えかけることを目的に用いられているとされる。ここで、ムスリム政治とは「イスラーム主義」「イスラーム政治」といった分析概念と区別される。スリランカでもグローバルな影響を受けたダアワ運動が活発化したが、それによりムスリム政治において重要である、ムスリムとしての意識の「対象化 (objectification)」が促進された。一方で、対象化によって、(真の)ムスリムとはだれか、スリランカにおいて「イスラーム」を構成するものは何かといった問いが立ち上がってくる。そして、それらの問いは SLMC が用いる言説においても重要となる。

第 2 章では、SLMC の党規約や党員向けの出版物、ホームページといった公式文書の分析から SLMC の掲げるイデオロギーを考察する。著者は、それらにおける記述の特徴として、それぞれの文書の対象に向けたイスラーム的な要素の選択的な利用と、記述におけるそうした要素の「曖昧さ」を指摘する。「曖昧さ」の背景には、スリランカにおけるマイノリティとしての立場や、スリランカのムスリムの異種混交性がある。例えば、様々な文書においてシャリーアへの言及がなされるが、同時にスリランカの現行法を支持することが述べられている。こうしたことから著者は、SLMC はイスラーム政治の確立を目指しているのではなく、スリランカでマイノリティであるムスリムの代弁者としての立場を示しており、その統合の象徴としてムスリムに広く受け入れられやすいイスラーム的な要素を用いていると論じる。

第 3 章は、党の中心メンバーへのインタビューの分析である。そこから明らかになるのは、SLMC にとって民族というカテゴリーを超えた「ムスリム」というコミュニティの統一が重要なテーマとなっていることである。SLMC は下位組織を通して各地で草の根的な社会活動を行ったり、その一つであるウラマーの団体を通して一般の人々の視点を共有すると同時に、選挙時にはモスクのコミュニティを動員や集票に利用している。インタビューからはこうした活動やそこで用いられる宗教的な要素は SLMC の存在の基盤となる「ムスリム」というコミュニティの範囲設定や有権者の動員において重要な役割を担っており、敬虔でイスラームの知識が豊富である党首のイメージも SLMC の正統性に寄与していると認識されていることが示される。一方で、多民族・多宗教国家スリランカにおけるイスラーム政治の実現可能性についてはメンバーによっても否定され、SLMC の政治的アジェンダはあくまで自らの帰属する国家の正統性を前提として、マ

イノリティである「ムスリム」の声を届けることであると論じる。

第4章と第5章では、2人の党首の国会での発言の分析をもとに、政党が用いるイスラーム的言説の変遷や、国内政治におけるSLMCの立場を明らかにする。第4章では、SLMCが初めて国会に議席を獲得した1989年から1992年までの初代党首アシュラフによる発言の記録を分析する。この時期は内戦のさなかであり、ムスリムを排除して進められていたインドとの平和協定や、1990年にタミル武装勢力により北部州の故郷を強制的に追放されたムスリムの問題について、アシュラフはムスリムの代弁者として積極的に発言してきた。結果的に、こうした内戦に関わる一連の出来事は全ムスリムの代表としてのSLMCの存在意義の構築に重要な文脈となった。アシュラフは「被害者」であるムスリムの代弁者として国会では政府に批判的な立場をとることが多かった一方、著者はその国家への忠誠心も指摘する。アシュラフの発言に特徴的なのは、国民の平和的な統合を主張する際にクルアーンを引用するなど、国内問題の解決策としてイスラームに言及する点であった。さらに、その際アシュラフはしばしば仏教の教えを引き合いに出した。こうしたことから、著者はアシュラフの発言からはムスリム政治の特徴が見て取れるが、それはラディカルでも対抗的でもなく、スリランカですでに受け入れられ理想とされているあり方に適合するものとして提示されていると論じる。

第5章では、2006年から2011年の間の2代目党首ラウフ・ハキームによる発言の記録を分析する。この間、スリランカは2009年には1983年から続いた内戦の終結という大きな転換点を迎えた。ハキームもアシュラフと同様に、内戦中は特に東部・北部州のムスリムの被害に関して積極的に発言を行ってきた。アシュラフとハキームの大きな違いは、ハキームは演説にクルアーンの引用などのイスラーム的な用語や象徴に言及することをせず、ムスリム政治の要素が見られないことである。著者によるインタビューでもハキーム自身がそのことを認めており、そうしたふるまいは非ムスリムも含めた有権者により受け入れられやすくするための配慮であることが述べられている。著者はその背景として、ハキームが大臣としてコミユナルな問題よりもナショナルな問題に対処する必要があったことに加え、当時の国内でのムスリム武装勢力の活動を指摘し、党への否定的なラベリングを避けるための慎重な行動であったことを考察している。

第6章では結論が述べられる。SLMCによる政治実践において重視されているのは、「すべてのムスリム」という想像上のコミュニティの構築であり、そうした想像上のコミュニティがSLMCの存在意義となっている。そのためにSLMCは言説の中でイスラーム的な要素を利用するが、それらは宗教的伝統を重視するためというよりも、スリランカの文脈における「被害者」「弱者」としての民族の指標として用いられている。著者は、そうした要素は受け手にとっては情動を喚起するものであり、帰属意識を生むために効果的であると論じる。シンハラ多数派政府や国内でムスリムが置かれる文脈もSLMCの政治実践に強く影響しており、SLMCはマイノリティ集団の代表としてコミュニティの損失を最小限にする戦略を取っていること、また、それによってコミュニティの統合を実現しようとしていることが論じられる。

以上、本書の内容を概観した。本書は、スリランカ初のムスリム政党であるSLMCに焦点を当てた学術書としては評者の知るところでは初めてのものであり、スリランカ政治を理解するにあたって大きな意義を持つ。また、イスラームと政治に関する議論は中東に関するものが大多数を占め、ムスリムがマイノリティである地域に焦点を当てたものはまだまだ蓄積が少ないといえる。そうした地域では国家のイスラーム化の実現は困難であり、実際にはムスリムを代表する政党は、SLMCのようにそれぞれの地域の文脈に応じてプラグマティックな実践を行っていることが本書でも指摘されている。こうしたことから、本書は南アジアや東南アジアといった、ムスリムがマイノリティとなる他地域での政治研究にも貢献できるだろう。

スリランカのムスリムについて地域研究を行う評者の立場から本書に注文を付けるとすれば、SLMCによる政治実践やそこで提示される「スリランカのムスリム」という想像上のコミュニティを、一般のムスリムはどう考えているのかについても言及があればさらによかった。本書を読み進める過程で、SLMCが言説の中で用いるイスラーム的な要素がどの程度有権者の感情に訴え、政党への支持に貢献しているのか、民族紛争の文脈でシンハラ・タミルとの関係において設立され「ムスリム」の代弁者としての立場をとってきたSLMCに対して、民族としての「ムスリム」を語る際に視点から抜け落ちてしまうマレーの人々がどのように感じていたのかといったことなどが気になった。著者も序章で述べているが、本書の議論のもととなるデータはSLMCが発信したものの、その中でも指導者層によるものが中心である。著者のおもな関心は

SLMCによる言説とそこで用いられるイスラーム的な用語や象徴との関係にあり、評者の関心は本書の射程の範囲外であるため仕方のないことかもしれない。しかし、党が発するメッセージの受け手である一般のムスリムの視点にも目を向けることで、SLMCによる政治実践をより総合的に評価することができるのではないだろうか。

とはいえ、以上の部分的な批判は本書の価値を減ずるものではなく、比較的長いスパンでの様々な資料の分析を通して、これまであまり取り上げられてこなかったSLMCによる政治実践を詳細に論じた点で大きな意義を持つ。なお、2009年の内戦終結後のスリランカでは、本書で取り上げられた時期とはムスリムを取り巻く状況が大きく変化しているといえる。タミル武装勢力という「敵」がいなくなったスリランカでは、グローバルなイスラモフォビアの潮流がシンハラ仏教ナショナリストによって利用され、ムスリムを標的とした批判・暴動が目立つようになった。一方で、ムスリムコミュニティ内での分極化も指摘されている。そうした状況に危機感を抱く全セイロン・ジャミーヤトゥル・ウラマー(All Ceylon Jamiathul Ulama, i.e. All Ceylon Jamiyyathul Ulama: ACJU)を中心とした宗教・コミュニティの指導者は、それぞれの宗教運動の指導者の協力の必要性を訴えると同時に、「スリランカ人アイデンティティ」や「平和の宗教」としてのイスラームのアピールにより民族間関係の再構築に奔走しており、ムスリムの代弁者としてリーダーシップを発揮している[Mihlar 2019: 2159–2161]。しかし、ACJUを中心としたまとまりも一枚岩ではなく、近年では他にもムスリムコミュニティを代弁する組織が設立されている。SLMCをはじめとするムスリム政党はというと、2000年にアシュラフが不審な死を遂げて以降求心力の低下が指摘されており、そのことがイスラーム改革を掲げる諸団体が政治・経済面でのムスリムの代弁者として各地で活動を行う背景となっていることも指摘されている[Faslan & Vanniasinkam 2015: 23–24]。こうした状況において、本書で論じられた「ムスリム」というコミュニティの統合の可能性と、そこでのSLMCなどのムスリム政党の役割については改めて検証が必要であろう。その際に、本書全体を通して強調されている、組織におけるイスラーム的な要素の利用への着目と、国内政治やグローバルなイスラーム化の影響など組織が置かれている文脈を踏まえて理解するというアプローチも重要である。本書は、今日のスリランカのムスリムを取り巻く状況を理解する上でも重要であり、さらなる研究発展のためにも一読の価値のある文献である。

<参考文献>

- Department of Census & Statistics, Ministry of Policy Planning and Economic Affairs. 2015. *Census of Population and Housing 2012*.
<<http://www.statistics.gov.lk/popousat/cph2011/pages/activities/reports/finalreport/finalreporte.pdf>>
(2022年5月16日閲覧)
- Faslan, Mohamed and Nadine Vanniasinkam. 2015. *Fracturing Community: Intra-group relations among the Muslims of Sri Lanka*. Colombo: International Centre for Ethnic Studies.
- Mihlar, Farah. 2019. “Religious Change in a Minority Context: Transforming Islam in Sri Lanka,” *Third World Quarterly* 40(12), pp.2153–2169.

(浅井 登紀子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

今井宏平(編著)『クルド問題——非国家主体の可能性と限界』岩波書店 2022年 xvii+144頁

クルド人は、国家を持たない世界最大の民族と言われており、トルコ、シリア、イラク、イランといった主権国家を横断する形で暮らしている。中東地域では、2011年の「アラブの春」を契機に、非国家主体が、主権国家の秩序に影響されるとともに、その影響力を徐々に拡大させてきた。そうした非国家主体の中で、本書で明らかにされるように、クルド民族組織は無視できない重要な存在の一つとなっている。本書は、クルド民族主義のイデオロギーを掲げる組織および政党に着目し、地域研究の方法に基づく詳細な記述と、